

「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」

著名人の遺言としては大変に有名ですが、森鷗外のもので、一切の名誉名声とは無関係に、一人の人間として葬りたいとの願いです。彼は11歳で上京、二度と戻らなかった故郷ですが、出身地は津和野、「小京都」とも称される、旧石見国(現・島根県)亀井藩の美しい城下町です。

小京都……旅行雑誌では根強い人気があるようで、由緒を誇る古い地方都市があります。1985年に組織された「[全国京都会議](#)」には53の市や町が加盟中です。横網格は山口、土佐中村、一乗谷ですが、他にも角館、遠野、足利、郡上八幡、松江、萩、大州、人吉と各地にあります。朝靄の中にしっとりとした町並みが目に浮かび、今すぐにでも訪れたい衝動に駆られますね。

ところで、「小」という言葉には「小さい・幼い」という意味の他に、併せて「拙い、物足りない」といった意味も含んでいます。つまり、軽蔑や見下したような響きがあります。その顕著な例は「小市民」という言葉ですが、他にも「小心者」とか「小乗仏教」などというのもあります。

それなら「小京都」の場合はどうかと言いますと、どうやら否定的な意味合いは無さそうです。京都の歴史・文化や伝統を取り入れたことについて、肯定的な誉め言葉となっているようです。敢えて言いますと、鄙びた地方都市であるにもかかわらず、よくぞここまでとでも言いたげな、驚き・いたわり・羨ましさが入り混じったような評価のようです。大切なことは、地元の人々がどのように思っておられるかですが、幸いにも京都との縁を誇りとされているようです。

さて小京都は、言わば**応仁文明の乱(1467～1477)**の“落とし子”のようなものかも知れません。[戦乱を避けて公家・僧侶たちが地方へ疎開をし、連歌師が遊歴をしたことが始まり](#)となりました。勿論、各地の大名たちが京都に憧れて、公家文化ならびにその継承者を庇護したことも大きい。例えば、山口の大内氏が「[鷲舞](#)」を保護してくれたおかげで、後に京都の祇園社へ逆に伝承され、現在も途絶えることなく続いているというようなこともあるわけで、感謝しないといけません。とはいえ、都の公家文化が地方に伝播していくための主役はやはり公家でありまして、なかでも**さんじょうにし さねたか**
三条西実隆(1455～1537)は最大の功労者だと言われています。

このあと実隆についてご紹介する前に、まず応仁文明の乱後の社会情勢を見てみましょう。

- 足利幕府・守護大名・公家・寺院などの権威が衰退し、代わって戦国大名が台頭。
- 商工業の発達ならびに商品流通が盛んとなる。(地方の特産物も生れた)
- 日明および日朝の交易が盛んとなり、やがて衰退。代わって南蛮交易が活性化してくる。
- 戦乱をよそに足利義政による東山文化(立花・茶の湯・能・連歌・作庭・絵画など)が栄える。

室町期から戦国時代への過程で、織田信長が登場する直前です。戦乱期という印象とは裏腹に、商工業・経済面や文化面では大きな興隆期を迎えたのです。ちなみに現代日本人の畳の生活とか芸能、工芸、嗜好のほとんどは、この時代に形成されたといっても過言ではありません。当時はヨーロッパでもルネッサンス期にあたっていますが、渾沌の妙というか実に面白いことですね。人々は戦火の中を逃げ惑うだけでは無かったようで、人間の逞しさが見えて、ホッとしますよ。余談ながら、アフガニスタンやイラクでも似たものがあればと思いますが、どうでしょうか。

有職故実

端的に言えば「先例、古くから定められた決まり事」という意味です。または、それを研究する学問のことを指します。例えば宮中の儀式では、冠位家格と服装、作法の順序と内容、といった序列と形式が、古来よりの習わしとして詳細に決められていて、それらに則って行動することが求められます。有職故実も知らないというのは能力以前の問題であり、軽蔑の対象となります。従って幼い頃より叩き込まれますし、併せて、古典籍の知識や和歌を詠めることが必須の教養となったわけです。勿論、武家の世界でも同様であり、有職故実は公武ともに必要不可欠でした。尚、今日の「有識者」と呼ばれる言葉も、本来はこのことから始まっております。

三条西実隆は有職故実の第一人者と呼ばれる公家で、“有職故実のお家元”のような存在です。彼以前にも二条良基^{よしもと}、次いで一条兼良^{かねら}という重鎮が居たのですが、実隆は彼らの後継者です。但し、良基や兼良が五摂家(近衛・九条・二条・一条・鷹司)という最高位の家格を誇るのに対して、実隆の家格となると公家の中では「中の上」といった位で、政治の舞台で中枢に登るようなことは生まれながらにして望みようがありません。実際、実隆自身もそうした活躍は望まなかったし、もともと不得手でもあったようで、むしろ政争に巻き込まれそうなことは極力避けたようです。また、成年前に父母や兄が亡くなったので若くして当主となり、それゆえ地道に家を守ることが第一に求められました。従って、実隆にはそうするより他に仕方が無かったのかも知れません。ただ、文芸面は抜群に有能で、周囲から継承者・指導者として期待され、重宝されたのです。

ここで、実隆が行なったことの主なものを挙げてみますと、おおよそ下記の通りです。

- ①有職故実、和歌の添削・合点……要するに、指導と評価です。
- ②『伊勢物語』『源氏物語』『古今集』『土佐日記』などの書写・注釈……絵巻物の製作です。
- ③宸筆源氏物語などの仲介……天皇の直筆による書写作品です。
- ④連歌会出席……連歌師・宗祇との深い交流は有名です。
- ⑤揮毫

実隆は、京都に滞在している大名やその重臣に対して、あるいは時には招きに応じて地方まで出掛けて、指導や評価、そして絵巻物の製作や仲介(時には販売も)などを幅広く行ないました。さらに言えば、連歌師が地方へ遊歴する場合に、実隆が関与した作品を携行することが多かったようです。もともと地方からの注文でもあったでしょうが、それ以外にも土産品や贈答品として歓迎されました。地方の大名などは少なからぬ札銭を与え、連歌師をも厚遇したわけです。

実隆が関与していない地域は今で言えば北海道と沖縄くらいなもので、あたかも超売れっ子の学者・芸能家・作家・評論家でありました。後世の研究者の評価によりますと、書は超一級で、和歌や連歌も一流のレベルとのことです。そして特筆すべき点は、『源氏物語』や『古今集』などが現在まで引き継がれて愛読されているのは、実隆の存在なくして考えられないということです。ついでに申し上げれば、今日でも三条西家は和歌や香道を家職として受け継いでいる家柄です。

実隆の時代から約500年が経過した今も、『源氏物語』や『古今集』の輝きは失われていません。彼には超一流の日本文化の粋を残した功績があります。もっと評価されてもいいでしょうね。

『実隆公記』

これは実隆が残した、彼自身の日記の名称です。二十歳の頃より開始して63年間、その間に5～6年ほど未記入の年がありますけれども、これも同様に超一級の史料だと言われています。宮中での出来事、世の中の状況、そして彼自身の思考や行動が、手に取るように分かるわけです。決して毎日の記述ではありませんが、ほとんど生涯を通じてというのは超人的と言えますね。

この日記に現れる本人は、実に現実的な姿を見せております。理想と現実との狭間で揺れ動く、ある意味で情け無い公家が登場します。彼には、天皇を中心とした古来の秩序が安定することが最も重要な行動の指針でした。有職故実と言えば外聞は良いのですが、ある意味では頑迷固陋^{がんめいこうろう}、コチコチの石頭の御仁でもあるわけです。何事につけ天皇が大切に、先例がすべての出発点です。しかしながら台頭する武家側は変革を求めて来るわけで、うまく付き合っていかなければならない。許容できる範囲でいかに行動するか、まるでハムレットの心境を見るような思いがします。

先述のように、朝廷や公家は没落の一途でしたから経済的には困窮していました。有職故実や家格を維持するための費用は不足するわけです。従って、実隆が広範な活動を行なうというのも、実は家計を助ける副業(アルバイト)であったわけです。日記によれば、およそ収入の30%近くがこうした副業で賄われています。それでも困窮の度合いが甚だしかったようで、その当時京都に庵を構えていた堺の茶人・武野紹鷗から、度々の献金がなされたとのことでした。

実隆は支援を受ける一方で、献金の仲介役を果してもいるのです。ご多聞に漏れず、天皇家も苦境にありましたが、本願寺の実如や山口の大内義隆に掛け合うなど、説得役を務めたのです。こうして見ると、決して凡庸な文化人ではなく、ある種の大立者の風情さえ漂いますね。

宗祇との交誼^{こうぎ}に触れます。この二人は『古今集』ならびに『源氏物語』の伝授にあたり師弟関係にあるわけですが、生涯を通じ、それを越えた心の通い合いがあるようです。『源氏物語』の隆盛は、宗祇が実隆を焚き付けたようなものですし、片や、初めての連歌集『新撰菟玖波集』^{つくば}については、実隆が宗祇を引き立てて編集が進んだようなものです。年齢差(34歳)を超えた同志でしょうか。宗祇はそもそも禅僧ですから、実隆の禅に関する理解も相当なものであったと思いますよ。

「不可説」「言語道断」……『実隆公記』によく出て来る言葉です。

禅語の「言語道断、心行所滅」また「言詮不及」から出た言葉で、本来は禅の悟りというものはいかなる言葉をもってしても説明がつかない、表現が出来ないものだ、という意味であるが、そこから転じて、「納得しがたい」というような意味合いに用いられた。

実隆は懸命に生きたと思うのですが、公家全体の衰運は如何ともし難いものだったはずですね。その憤懣でしょう、この言葉が表わしているようです。面白いと言うと実隆には失礼ながら、この時代はまことに多様で、奥行きも深く、興味津々と言わざるを得ません。ところで彼の墓は嵯峨野の二尊院にあるのですが、果してただ一介の人間として葬られているのでしょうか？